

工学部建設学科におけるStudy Skillsの現状と問題点

工学部建設学科学科長 加藤大介

1. はじめに

工学部建設学科では平成10年度より1年生に対し教養科目「建設基礎演習」を必修科目として開講しています。これは入学後早くから専門的な教育を行うことにより、学生の専門に対する興味を誘起し、入学直後の向学心あふれる気持ちを維持しつづけてもらうことを狙ったものです。本稿では以後3年間の本演習を振り返り、その現状と問題点を報告します。

2. 開講の背景

まず、本演習を開講するに当たっての学科内の議論から紹介します。はじめにでふれたように、本演習の開講理由は学生の専門に対する興味の誘起と学習意欲の維持ですが、これが留年対策の一環であることはいうまでもありません。当初学科では留年対策としての教養科目を2通りの方法で開講しようと考えていました。すなわち、①各教官がそれぞれの専門分野について基礎的な内容を解説し、本来の目的である学生の向学心を誘起する方法、及び②家庭教師的な手法により専門教育ばかりではなく身の上相談にまでする方法、です。議論の末に、②の手法が選ばれました。これは①は学科の全ての学生が聴講できるわけではないけれど、建設学科では既に「くらしと環境」が全学向けに開講されていることも考慮されましたが、むしろ卒業研究のような顔と顔を合わせる教育の重要性を各教官が認識していたためと考えています。今から3年前のことです。

3. 演習の現状

演習は1年生を4人のグループに分け、建設学科全教員がある1グループを半期の間担当して行います。カリキュラム上実施日は金曜V限となっていますが、担当した学生全員が金曜IV限の授業がないなどの場合などは繰り上げてIV限に行うなど、その実施時間は教員に任されています。また、実施内容も各教員に任されていて、以下に例を示します。

- (1) インターネット等を使って文献検索や情報取得をする手法を体験させる。
- (2) PCを使った図面作成などを体験させる。
- (3) いくつかの専門書を読んで発表させる。あるいは卒業研究梗概集を題材にして輪講する。英語の文献の場合もある。
- (4) 進路について詳細な説明をする。
- (5) 期間中建築物や建設現場などを見学する。これは数グループで共同して行う場合もある。
- (6) カリキュラム、私生活等の相談。

4. 演習の問題点

まだ3回終わったばかりですが、実施上の問題点として以下のような点が上げられています。

- (1) 各教官が同じ学生とのみ接する形態、すなわち学生も同じ教官とのみ接する形態は常に議論の対象になる。すなわち、当たった教官により学生の負担に差があること、各教官で行っている内容が異なること、取り組む時間(課題)に差異があること、成績評価方法に差が

あること等が最大の問題として認識されています。

- (2) 各教官がどのような内容でやっているのかお互いに知らないで、学期終了時に情報交換をすることが必要である。
- (3) 1つの問題について系統的に学ぶスタイルではないので、学生に達成感を持たせるのが難しい。
- (4) 全員が毎週1回の演習を担当するので、教官の負担は相当大きい。

5. おわりに

本演習は必修なので学生は真面目に出席しており、また、他の単位取得状況を見ると、この演習は有効であると思われます。しかしながら、現在は3年から4年に進級する際にしか留年の関門はないので、この演習を開講したことが留年対策として有効であったかどうかはまだ判断できません。ただ、私自身の感触で言えば、たとえ4人であってもよく知った学生がいるということでこの学年に親近感がわきますし、おそらく学生側も同じ様な感触を持ってくれていると信じています。そしてこれが本演習の開講の意味と理解しています。